

## 第50回夏季教育研究講座「詩の鑑賞指導」レポート

豊中市立南丘小学校 多鹿 雅昭

春に、六年生を送り出し、続けてまた六年生の担任。卒業した子どもたちと兄弟関係になる子がなかった。ので、すべて初対面の子どもたち。

今の六年生は、手のかかる子どもたちが多いと聞いてはいたが、「知り合えばみな友達、何とかなる」と思い、新学期のスタートをした。

子どもたちの様子を観察していると、言葉遣いの荒さが目につく。A君を中心にしてもめことがおこったときなどに、飛び交う言葉の荒っぽさは、すごいものである。攻撃的、嘲笑的なことばがとても多く、学級の大きな課題だと感じた。

学習の場で、子どもたちに勉強が「好きか嫌いか」聞いてみた。国語が嫌いという子が数人いたので、理由を聞くと「読むのが苦手」「自分の気持ちをいうのが苦手」などと答えてくれた。どうやら、自分を表現することが苦手なようである。漢字の練習ノートを見せってもらうと、ていねいにしっかりした字を書いている子もいるが、乱雑な字を書いている子が多い。「読むこと」「書くこと」も、好きではないようである。また、シャープペンシルで漢字練習をするのも気になり、鉛筆を使うように指示した。

人と人とのつながりも、自分の思いの表現もみな「言葉」を介して行っている。子どもたちに「言葉」をもっと大切にしてもらいたい考え、教室に「詩」を位置づけることにした。背面黒板に詩を書き、朝の会で音読することを始めた。

しっかりした声で音読ができ、美しい言葉の響きを感じるようになれば、きっと学級での生活が、より柔らかなものになるだろうと思っている。

校内研究会で「詩」の研究授業をさせてもらうことになり、次の四つの作品を取り上げた。それぞれ趣のちがった詩である。

○四つの作品について

「犬」(金子みすゞ)の詩では、最後の行「ふっとさみしくなりました」を取り上げ、そのわけを考える。

「岬の犬」(鶴見正夫)の詩では、情景を思い描くための詩として取り上げる。イメージ豊かに読みたい。

「じよる」(小林純一)の詩は、語り口調で書かれた詩。自分の描いた語り手になって音読したい。

「ウソ」(川崎 洋)の詩では、詩を通して自由に語り合うことを願っている。おもしろい書き方の中にも、考えさせられる内容が盛り込まれた詩。

○指導計画(全5時間)

第一次(1時間)「犬」(金子みすゞ)

―感動の視点を探る―

(1時間) 感想の交流

第二次 (1時間) 「岬の犬」(鶴見正夫)

―イメージを描く―

第三次 (1時間) 「じよろ」(小林純二)

―詩をイメージ豊かに音読する―

第四次 (1時間) 「ウソ」(川崎 洋)

―思いを語る― (公開授業)

## 【詩を読む1】

犬 (金子 みすゞ)

うちのだりあの咲いた日に  
酒屋のクロは死にました。

おもてであそぶわたしらを、  
いつでも、おこるおばさんが、  
おろおろ遊ばせておりました。  
その日、学校でそのことを  
おもしろそうに、話してて、

ふっとさみしくなりました

## 目標

・詩を読む楽しさを味わう。

・ふっとさみしくなったわけを考える。

本時の展開

①題名と作者について知る。

②教師といっしょに視写する。

③漢字の読み方・言葉の意味を知る

酒屋(さかや)

学校(がっこ) リズムを合わせるため

おろおろ(泣き声のふるえるようす)

だりあ(ダリア)

クロ(酒屋のおばさんが飼っていた犬)

④音読する。

・教師が音読する

・みんなが音読する

・席順で音読する。

⑤おばさんについて話す。

・ぼくらにとっておばさんは、どんな存在だったか。

⑥音読する

・席順読み

⑦自分の考えを書く。

「ふっとさみしくなりました。」

さみしくなった訳について考え、書く。

⑧音読する。

読みたい子がいれば読んでもらう。なければ、みんな読んで終わる。

○問いかけについて

「なぜ、ふっとさみしくなったんでしょうか？」

その訳を書いてください。

・クロが死んだから

・おろおろ泣くおばさんの姿に

・おもしろおかしく話していた自分自身に

の三種類に集約された。読み手の成長の様子を知ることができるとは、ないか。

△クロが死んだから△

●T・R (女)

①クロがかわいそうになったから。

②クロもかわいそうやけど、おばさんもかわいそうだと思います。

●H・I (男)

①さみしくなったのは、犬がしんだから。それをきいてふっとさみしくなった。

②学校みんながかなしくなったのは、いつもおこるおばさんが、おろおろないてるからよっぽどかなしいことがあったんだなと思って、ふっとさみ

しくなった。

●M・K (男)

①動物が死んだのに、学校でおもしろそうに話しててかわいそうになったから。

②みんなのを聞いて、やっぱりおばさんがかわいそうだなと思った

●Y・Y (男)

①酒屋のクロが死んでいたから。

②クロが死んでいたのを、おばさんが泣いていたのを見て、かわいそうになった。

△おろおろ泣くおばさんの姿△

●O・E (女)

いつでもおこってるおばさんなのに、クロが死んですごく悲しんでいたことを思いだしてさみしくなった。

●K・K (男)

おばさんのきもちをわかったから。

●S・R (男)

いつでもおこるおばさんが、おろおろ泣いていたから、ふっとさみしくなった。

●T・R (女)

いつもおこられてむかついたりするけど、今回は、

おばさんがなくてたから、そのさびしさが伝わってきた。

● T・G (男)

飼っていた犬が死んだおばさんを見てさみしくなった。

● M・A (女)

① いつもおこっていたおばさんが泣いていたから、もうおこらないのかな？とおもったから。

② いつもうるさいおばさんが、周りの人を気にしないほど泣いていたのに、それをおもしろそうに話している自分にふっとさみしくなった。

● M・M (女)

おもしろそうに話していたけど、やっぱりかわいそうだなと思うた。

● M・T (男)

おばさんのきもちがわかったから。

● M・R (男)

いつもこわいおばさんが、おろおろ泣いていたから？

● Y・A (男)

① いつもはおこるおばさんなどが泣いていて、いつもとちがうようになったから。

② 悲しんでいるおばさんのことをバカにしている自分の心がさみしい。

〈おもしろおかしく話していた自分自身に〉

● A・S (女)

クロが死んでおばさんが泣いているのに、学校の友達はおばさんが泣いたことに対して笑っているからおばさんの気持ちをわかっていなかった。

● A・T (男)

自分たちが笑っていたのに、自分たちもさみしくなったからです。

● K・M (女)

犬が死んで、おばさんが泣いていたことをおもしろがっていたから、さみしくなった。

● N・T (男)

クロが死んでしまったり、おばさんが泣いたりして悪いことばかりおこっているのに、おもしろそうに話したから。

● N・M (女)

クロが死んでおろおろ泣いているおばさんを、友達とかがからかっているのを見て、ふっとさみしくなったと思う。

● H・Y (女)

おばさんにとって悲しいことを、ふざけていってしまっ、おばさんにとっても悪いなーという気持ちになったから。

● F・A (女)

おばさんが泣いてたのにおもしろがってたから、ふっとさみしくなったと思った。

● B・A (女)

犬が死んで、おばさんが泣いてるのに、おもしろがって話してたから。

● M・R (男)

クロが死んで、おろおろ泣いてたおばさんのことをおもしろそうに話したから。

● M・A (女)

①おばさんは、クロが死んじゃったのを見て泣いているのは、それが悲しいからで、それを笑う私ら自身がむなしくなったから。

②みんなで最後は、さみしくなるんやったら、最初から笑うなよ。おばさん笑ってたら、くろもいっしょに笑ってることになる。

● M・M (女)

クロが死んで、おばさんが泣いているのに、自分たちはおもしろく話していたけど、そんなことでよろこんで話している自分が、悲しいと思った。

● Y・H (男)

クロが死んだから、おろおろ泣いているのに、それをおもしろくなくて話しているから。

● Y・M (女)

クロが死んで、いつもおこっているおばさんが、おろおろ泣いているのは、それほど悲しいから。それを面白がって話しているのをみてふっとさみしくなしたのは、悲しみがわからない人がいるから。  
※①は第1時の感想、②は第2時の感想

【詩を読む2】

岬の犬

(鶴見 正夫)

室戸岬には  
何もなかった。

何も無いけど  
犬がいた。

白く冷たい灯台の下、  
わずかに咲いたコスモスのそばに、  
くさりにつながれ  
ほえもせず  
一匹の黒い犬がいた。

あるじはどこかと

さがしたけれど

あたりに

それらしい人はなく、

声もかけずに

立ちさろうとしたが、

なぜだか

犬は

しっぽをふる。

ぼくは

思わず立ちどまった。

犬の頭をしきりになでて

並んでしばらくしゃがみこんだ。

足もとからひびく

はげしい波の音、

犬の毛をさかだてて吹く

強い秋の風。

何も無い

だれもいない

岬の上で、

一匹とひとりの

知らないどうし。

生きて

めぐりあって

ほんのひととき、

ぼくと犬とは

だまって海を見た。

風にひれふす

コスモスをだいて、

だれにもしられず

海を見ていた。

目標

・ 詩を読む楽しさを味わう。

・ 音読し、詩の情景を自由に思い描く。

本時の展開

① 黒板に「岬の犬 鶴見正夫」と書く。

・ 岬についてたずねてみる。

② 詩を書いたプリントを配る。

・ 自分で読む。

③ 詩が九連でできていることを知る。

・ 番号を連の頭にうつ。

④ 言葉の意味を知る。

・ あるじ…主人

・ さかだてて…さかさにたてる

- ・ひれふす：地面にくっつくように
- ⑤ 教師が読む。
- ・印象に残っていることを話し合う。
- ⑥ 音読する
  - ・みんなで読む
- ⑦ 9人で連ごとに音読する。(全員)
- ⑧ イメージを話す。
  - ・目に浮かんだ情景などを自由に話す。
- ⑨ 音読する。
  - ・全文を音読する(数人)。
- ⑩ 好きな連とその理由を書く。

#### △好きな連とその理由▽

- A・S (女) 8連  
生きてめぐり合うと言う言葉が、じーんと来るから。
- A・T (男) 1連  
文が短いから。
- O・E (女) 8連  
何となく好きやから。
- K・M (女) 5連  
友達どうしみたいだから。
- K・K (男) 5連  
いっしょに遊んでそうやから。
- S・R (男) 6連

激しい波の音というところではびしらとびらと「  
ろが好きだから」

- T・R (女) 8連  
「生きてめぐりあって」っていうのが、運命ぽいっ  
なあくと思った。

- T・R (女) 5連  
好きな連は、5連です。
- T・G (男) 9連  
理由は、とくになし。
- N・T (男) 6連  
様子がよくわかったから。
- N・M (女) 8連  
なんとなく、せつない。
- H・Y (女) 8連  
ただ、だまって海を見つめている感じがよかった。
- H・I (男) 6連  
強い秋の風というところが、よいところだと思った。
- F・A (女) 8連  
なんとなく。
- M・R (男) 9連  
海を見ていたというところが、のんびりとしたとこ  
ろだから。
- M・A (女) 8連  
生きていると、いろいろある。

● M・M (女) 8連

だまって海を見たというところがいい。

● M・T (男) 8連

静かで穏やかそうだから。

● M・A (女) 8連

生きていて出会った、ほんの少しの時間をぼくと犬の二人で海をながめているところが、なんとなくいい。

● M・M (女) 7連

なんか一人と一匹で、だれもいなくてなんもない。自由みたいで、いいなあと思った。

● M・R (男) 4連 7連

私の好きな連は、4連で、犬がしっぽをふっているところがかわいらしい。7連で、知らない同士なのに心が通っているみたい。

● M・K (男) 8連

のんびりしてるから。

● Y・A (男) 5連

やっと犬をさわったから、犬と知り合ったから。

● Y・Y (男) 4連

しっぽをふっているから。

● Y・H (男) 3連

灯台が出てる場面だから。

● Y・M (女) 5連

「ぼく」が、犬がしっぽを振るところをみて、一緒にいてあげようと思ったのかもしれない。「ぼく」は、とてもやさしいなと思った。私は、犬がきらいだけど、犬の気持ちもわかってあげたいなと思った。

### 【詩を読む3】

じよろ

(小林純二)

じよろ、という字はね、

如 雨 露と書くんだよ、

雨降る如く、

露おく如く……

ね、

水をまくのじゃなく、

雨を降らすように、

やわらかく、やわらかく……

ヨシコもやっこらん。

そう、そう、

しやわ しやわ しやわ

しやわ しやわ しやわ

ほら、

葉っぱが声をあげているだろう。

草がからだをくねらせているだろう、



花びらが輝きだしたろう、  
うれしいのさ、喜んでいるのさ。  
じよろで雨を降らせているとき、  
人は天の神さまになる……

え、天使のほうがいい？  
そう、子どもだったら天使になる……

やさしい気持ちになって、  
やさしい顔になって……

おぼえておおき、  
じよろは 如 雨 露。

水をまくんじやないんだよ、  
あめをそそぐんだよ、  
露をうるおすんだよ。

しやわ しやわ しやわ  
しやわ しやわ しやわ  
しやわ しやわ しやわ  
やわらかく、やわらかく。

### 目標

- ・ 詩を読む楽しさを味わう。
- ・ 情景を思い描き、音読する楽しさを味わう。

### 本時の展開

- ① 黒板に、題名と作者名を書く。
- ② 詩を書いたプリントを配る。

「じよろ」を知っているか、たずねる。

漢字の読み方を知る。(板書する)  
如雨露(じようろ)

雨降る如く(あめ ふるごとく)  
露おく如く(つゆ おく 如く)

- ③ 教師が範読する。
- ④ 詩の印象について話す。

・ 詩の持つ雰囲気を言葉で表す。  
(やさしい) (あたたかい)

- ⑤ 教師がもう一度範読する。
- ⑥ 表現について考える。

・ 「語りかけ」「話しかけ」調子  
⑦ ヨシコについて話し合う。

・ 「ヨシコ」のイメージ化  
(幼稚園・小学校低学年)

- ⑧ 話し手について話し合う。

・ 書かれていないので、子どもが誰をイメージしたのか、なぜそう思ったのか、自由に話してもらおう。  
(おじいちゃん) (おばあちゃん)

- ⑨ 自分のイメージした人になったつもりで、音読する。
- ・ 自分で音読の練習をする。
  - ・ 席順読み。

### 【児童の感想】

○やさしい感じがする詩だった。お父さんをイメージ

しました。

○やさしくて、温かい感じがした。おじいさんをイメージしました。

○柔らかい感じで、やさしいしだと思った。おとぎ話をイメージしました。

○ほんわかとした感じがした。おじいちゃんを思い出した。

○優しい感じ……。おばあちゃん。

#### 【詩を読む4】

ウソ

(川崎

洋)

ウソという鳥がいます

ウソではありません

ホントです

ホントという鳥はいませんが

ウソをつくと

エンマさまに舌を抜かれる

なんてウソ

まっかなウソ

ウソをつかない人はいない

というのはホントであり

ホントだ

というのはえてしてウソであり

冗談のようなホントがあり

涙ながらのウソがあつて

なにがホントで

どれがウソやら

そこで私はいつも

水をすくう形に両手のひらを重ね

そっと息を吹きかけるのです

このあたたかさだけは

ウソでないと

自分でうなずくために

#### 目標

・詩を読む楽しさを味わう。

・詩の内容から、いろいろ考えたり想像したりすることが出来る。

・詩を通して、話し合う楽しさを味わう。

本時の展開

①題名と作者名を黒板に書く。

「題名から、どんな詩を想像しましたか。」

②詩を書いたプリントを配る。黒板にも掲示する。

③範読。

「先生が一度読んでみます。みなさんは、プリントを見ておいてください。」

④読む。

「読む練習をしましょう。先生が指で押さえますので、遅れないように。」

(指黙読2回)

「声を出して、読んでみましょう。」

(指音読1回)

「ひとりで読んでもらいます。」

(席順読み)

⑤この詩の印象を話す。

「この詩を読んで、どんな感じがしましたか？」

⑥言葉の意味を知る。

「わからない言葉がありますか？」

・ウソ (写真で説明)

・えてして…ややもすると、ひよっとすると

(類語 だいたい)

⑦読む。

「次の人に読んでもらいます。」

⑧話す。

2連について話す。

「ウソをつく」とエンマさまに舌を抜かれる、なんていわれたことある人？」(読んだ子に聞く。他の子にも聞く。)

⑨読む。

「次の人に、また読んでもらいます。」

⑩話す。

3連について話す。

「これ、ホント？」

「うそをついたこと、ある？」

「最近ついたうそを、しょうかいしてくれませんか？」

⑪読む。

「次の人に、また読んでもらいます。」

⑫話す。

4連について話す。

「涙ながらのウソってわかりますか？」

教師の語り

「こんなウソ、どう思いますか？」

⑬5連を動作をつけて読む。

⑭好きな連とその理由を書く。

⑮みんなで読んで終わる。

〈好きな連・感想〉

● N・T (男)

4連。冗談のようなホントがあつて……というところが、不思議だった。

● M・T (男)

1連。ウソという鳥がホントにいたから。おもしろい詩だった。

● M・M (女)

5連。なんかいい感じ。おもしろい詩だった。

● M・A (女)

5連。あたたかい感じがするから。ウソがあつた

りホントがあつたり、アベコベだなあ。

● M・K (男)

1連。なんとなくややこしくて、おもしろいから。ウソなのかホントなのかわからないけど、おもしろい。

● F・A (女)

4連。やっぱり、ウソはいけないと思った。あと、不思議な感じがしたあ。

● H・I (男)

4連。涙ながらのウソがあつて、というところが、なんだかとてもきみしい感じがするから。

● Y・M (女)

4・5連。わたしは4と5が好きです。いろいろな

「ウソ」や「ホント」を考えて、なにがなにやらわからなくなってきた、へたしたらこの世界までもウソかホントかわからなくなってきたそう。自分のあたたかさだけは、ホントである。

● Y・H (男)

全体。ウソという言葉を使っているのに、良い詩だと思ふ。

● T・R (女)

4連。その詩の通りで、同じ気持ちになった。

● M・A (女)

4連。本当というものの方がウソっぽくて、ウソをつかれた方が本当っぽいから。そういう現実的なことがかいてあるから。詩全体にすごい関心を持てた。なんか、今の私らのことみたい。(3連が)

● N・M (女)

5連。なんかウソではないこれは、みたいな感じがいいから。

● O・E (女)

4連。「なにがホントで、どれがウソやら」のところが好き。不思議な感じがした。

● K・M (女)

私が一番好きなのは、5連です。理由は、なんとなく。ウソにも、いろんな種類があるんだなあと思つた。

● A・S (女)

5連。なぜかというのと、自分の手のひらに息を吹きかけて、このあたたかさだけはウソではないと思えるからです。ウソは、悲しいのと楽しいのがあるから、楽しいウソをついたほうがいいと思った。

● M・R (男)

1連。ウソという鳥は、かわいい。この詩は、ウソをいっているのかホントをいっているのか、わからないし、ややこしい。

● K・K (男)

2連。ウソ、全員つくんやなーと思った。

● T・R (女)

4連。やっぱりウソはだめだと思った。

● M・M (女)

5連。これは、ホントだっていいきれんような感じ。

● Y・A (男)

4連。言い方がおもしろい。不思議な感じ。